

児童文学における老人と孫世代の相互交流

The Interaction of the Old and the Grandchild Generation
in Juvenile Literature

吉原 崇 恵 ・ 小 川 裕 子 ・ 菅 野 圭 昭
Takae YOSHIHARA, Hiroko OGAWA and Yoshiaki KANNO

(平成元年10月11日受理)

研究の目的

老人をかかえる家庭では、子どもたちは老人をどのように見ているだろうか。また、老人を理解するために、子どもにどのような教育が必要であり、可能であろうか。老人の理解のための「教材」として、どのようなものが考えられるであろうか。

今回は、そのための基礎研究としていくつかの児童文学における「老人と子どもの交流」のありようを分析することにした。次に引用するのは、小学校6年生の作文である。

「僕は、ずっとおじいちゃんが好きだったのに、この頃は、もういやでいやできらいになってしまった。……おじいさんは、年をとってばけてきたでしかたがないと思おうとしても、なんでかしらんけど、みるとむかむかしてくるし、いやになってしまう。……このあいだ、……おかあさんが、『こらえてやさしけうしていかな、家じゅう、たるうなるでなあ』と、ちょっと涙ごえていった。そういうときは、ほんとうにそうだと思うけど……いやな気持ちの方が、今はたくさんある。」¹⁾

ここには、悩みながらも、おじいさんを誠実に支えていこうとしている家族の様子がかかえる。

「教師に求められるのは、子どもが、そうした老人を人間としてみる目を新たに開かれるような学習の機会を学校の中に用意すること」といわれている²⁾。これに対して、教科書のとり上げ方は、高齢者の増加と、それを支える社会の負担や若い世代の負担が増えることをデータで示すという形になっている。子どもの内面にまで配慮した指導のあり方についてはまだまだ、これからの研究と実践が必要とされるであろう。

現代の生活における核家族化と家族員の減少および出産と死の外部化の中で、子どもは人間の根本的な問題、つまり、いのちの尊さ(誕生・成長・老い・病気・死など)について学ぶ機会が少なくなっているのが一般的である。冒頭の子どもの悩みに対して、家庭科はどのように対応できるのだろうか。子どもが他者を理解し人間への信頼を獲得するとともに、老人問題を考えていく場を学校教育の中に創造していきたい。そのためには、「老いと老人についての教材」の開発が急務ではないかと考える。

「老いと老人についての教材」の開発を進める時、一方では老いや老人問題についての研究成果をふまえなければならない。他方、子どもが「老い」や「老人」についてどのように理解

するのか、その過程を知る必要がある。

宮地敏子は「現実の生活の中で希薄化している老幼の絆を考え直し、高齢化社会へ向け、互いの人間性を尊重した『優しい』老幼の共生を模索していこうとする子どもの本が増えてきた。」と指摘し、絵本や創作童話の最近の流れを分析、紹介した³⁾。また、高橋美恵子は、宮地の研究分析に啓発されて「老い」や「死」をめぐる最近の作品の特徴や意義を概観した。そして、「老いゆくものと子どもの関係が、ある出来事や事件をきっかけにして、子どもの『成長』と、老人の『老い』が交叉する瞬間があることは見逃せず、それは子どもの『精神的な成長』と老人の『老いの受容』の瞬間というように言い換えることが出来るのかも知れない。」と考察した⁴⁾。これらの研究は、文学によって時代の危機がとらえられ、「老い」や「死」をリアルに表現した絵本や児童文学がその数を増しつつあること、作品の中で「老い」や老人を子どもが理解する過程が描かれているということを明確にしてくれていた。さらに、子どもが老人を理解する過程に様々な形があることを暗示していた。そこで、本論では、宮地や高橋が取り上げた作品を含め、対象作品をできる限り網羅して、「老人と子どもの交流の様相」を分析することにした。ここでいう交流とは理解し合うという意味である。そして相手に対する見方が変わる、深まる、自分自身も変わるという意味で用いている。本論では老人と対峙する時代の呼称として、宮地の「幼」、高橋の「子ども」に相当する用語を「孫世代」とした。

対象とする作品は老人像、老人と孫世代の交流、孫世代が老人を理解する過程、老人にとっての孫世代との交流の意義などについての情報を与えるものと思われる。本論では老人像は、孫世代が理解する対象として位置づけ老人像そのものを分析することはしない。

本論ではまず作品の内容を構成する要素を分析する。この時、もう一人の孫世代としての読者がいる。読者がどのように読んでいくかを分析するのは今回の目的ではないが作品の内容を分析するにあたり作者は読者年齢を想定しているものと仮定して読者年齢層別に分析して作品内容の違いがあるかどうかを分析する。

本論で明らかにしたいことは作品中の孫世代が老人を「理解する様々な型」と「老人にとっての孫世代との交流の意義」である。また、老人と孫世代の交流の場の条件を抽出する。今回の研究は「老いと老人」について孫世代の理解のしかたを調べる研究の一つである。それは「老人問題・高齢社会」を家庭科の教材として開発するための基礎的な作業として行うものである。

研究の方法

書店や出版目録から老人が登場すると思われる絵本・児童文学を収集して精読した。作品の読者年齢層については、明示してあるものに準じて分類した。訳書の発行年代はわが国における発行年月日をもってした。

対象にした資料は65冊である。その一覧を表1に示した。

表1 老人と孫世代の交流を描いた児童文学

No.	作 品 名	作 者	国	発表	
1	トーマスのケマラー	ラ・フランス	ドイツ	1987	小学校 高・中学年向き
2	アバターの顔	ラ・フランス	ドイツ	1987	
3	高層おぼろ	ラ・フランス	ドイツ	1987	
4	お窓のむこう	ラ・フランス	ドイツ	1987	
5	お窓のむこう	宮川ひろ子	ドイツ	1987	
6	お窓のむこう	今村ひ葦	ドイツ	1987	
7	お窓のむこう	征矢清子	ドイツ	1986	
8	お窓のむこう	神沢利子	ドイツ	1985	
9	お窓のむこう	ペーター・ホルツ	ドイツ	1985	
10	お窓のむこう	木村幸子	ドイツ	1984	
11	お窓のむこう	オットマー・ラング	ドイツ	1983	
12	お窓のむこう	C. K. ストリート	アメリカ	1981	
13	お窓のむこう	ペーター・ホルツ	ドイツ	1979	
14	お窓のむこう	平方浩介	ドイツ	1979	
15	お窓のむこう	木島始	ドイツ	1972	
16	お窓のむこう	エリナー・フーヨン	イギリス	1970	
17	お窓のむこう	ミラー・ローク	イギリス	1969	
18	お窓のむこう	新美南吉	イギリス	1942	
19	悦子	悦子	デンマーク	1989	小学校 中・低学年向き
20	悦子	悦子	デンマーク	1987	
21	悦子	悦子	デンマーク	1987	
22	悦子	悦子	デンマーク	1987	
23	悦子	悦子	デンマーク	1987	
24	悦子	悦子	デンマーク	1986	
25	悦子	悦子	デンマーク	1986	
26	悦子	悦子	デンマーク	1986	
27	悦子	悦子	デンマーク	1985	
28	悦子	悦子	デンマーク	1985	
29	悦子	悦子	デンマーク	1985	
30	悦子	悦子	デンマーク	1984	
31	悦子	悦子	デンマーク	1984	
32	悦子	悦子	デンマーク	1983	
33	悦子	悦子	デンマーク	1983	
34	悦子	悦子	デンマーク	1983	
35	悦子	悦子	デンマーク	1983	
36	悦子	悦子	デンマーク	1982	
37	悦子	悦子	デンマーク	1982	
38	悦子	悦子	デンマーク	1980	
39	悦子	悦子	デンマーク	1979	
40	悦子	悦子	デンマーク	1973	
41	おばあちゃん	としまひろ	アメリカ	1988	絵 本
42	おばあちゃん	としまひろ	アメリカ	1988	
43	おばあちゃん	としまひろ	アメリカ	1988	
44	おばあちゃん	としまひろ	アメリカ	1987	
45	おばあちゃん	大森真乃	アメリカ	1987	
46	おばあちゃん	大野昇司	アメリカ	1987	
47	おばあちゃん	ゲルタ・マリ・シャイデル	ドイツ	1987	
48	おばあちゃん	バーバラ・クニ	アメリカ	1987	
49	おばあちゃん	ジョン・ロット	アメリカ	1986	
50	おばあちゃん	ジョン・バーン	アメリカ	1985	
51	おばあちゃん	神沢利子	イギリス	1985	
52	おばあちゃん	神沢利子	イギリス	1985	
53	おばあちゃん	チャールズ・キンギ	イギリス	1983	
54	おばあちゃん	チャールズ・キンギ	イギリス	1983	
55	おばあちゃん	あだもと	イギリス	1983	
56	おばあちゃん	南本樹一	イギリス	1982	
57	おばあちゃん	与田準一郎	イギリス	1982	
58	おばあちゃん	与田準一郎	イギリス	1981	
59	おばあちゃん	与田準一郎	イギリス	1981	
60	おばあちゃん	チャールズ・キンギ	イギリス	1979	
61	おばあちゃん	五味太郎	イギリス	1979	
62	おばあちゃん	フラング・ランデンバーグ	アメリカ	1975	
63	おばあちゃん	清水達也	アメリカ	1973	
64	おばあちゃん	神川利子	イギリス	1969	
65	おばあちゃん	ヒュー・ロフティング	イギリス	1954	

作品の内容の構成を把握するために分類を行った。分類の視点は、一つには「老人」の側から「老人の生き方が表れた活動期」と「老いが進行した病弱期」である。他の一つには孫世代の「老人に対する関わり方や、心情」に視点をあてた。

項目1～項目4は「老人が生き生きと元気に日常生活をおくっている状態（活動が描かれている部分）」である。さらに、項目5～項目8は、「老いが進行して、病弱になり老醜さえも目だつようになる状態」である。二つの状態においてそれぞれ、

- ・老人の個性と生き方 (項目1と5)
- ・孫世代が老人から助けをもらう (項目2と6)
- ・老人を拒否したり、疎んじたりする (項目3と7)
- ・孫世代が老人を助ける (項目4と8)

という分類である。

結果と考察

1) 全体の傾向

内容分類の8項目について現出の作品数を表2に示した。

表2 作品内容分類と作品数—老人と孫世代の交流—

		老人の経歴	孫は被庇護	老人を拒否	老人は被庇護
		項目1	項目2	項目3	項目4
老 動 期 の 活 動 期 の 進 行	全 体	63	48	11	34
	高・中学年向	17	15	4	11
	中・低学年向	21	16	4	11
	絵 本	25	17	3	12
		項目5	項目6	項目7	項目8
病 弱 期 の 進 行	全 体	22	5	5	20
	高・中学年向	11	4	2	9
	中・低学年向	4	1	1	4
	絵 本	7	0	2	7

全体の傾向をみると、老人の個性や行き方について元気な時を項目1で記述している作品数は65作品中63作品という高頻度である。例外の2冊は「ねんねしたおばあちゃん」(作品No.38)と「おばあちゃん」(作品No.58)である。前者は孫の世話をする姿がそのまま老人の生き方になっているので項目2の内容と判断した。後者は、まったく寝たきりの状態の老人が描かれているものである。

項目1は老人の人生、すなわち老人の経歴やしてきたこと、人生観や価値観、日常生活の中で自然と表れる生きる知恵などについて語っている。

これらは、後の「老い」の進行状態においても、老人の存在を輝いたものにすることがある。

次いで多い内容は、項目2の孫世代が世話をしてもらい庇護される場面である。48冊に記述があり主な作品はNo.13, 19, 44, 51で、これらは親の代わりに育ててもらい、遊んでもらい、物語をもらうなどである。

逆の場合、つまり孫世代が老人を心配し助けるという関係は項目4で、描いた作品は34冊と約半数におよんでいる。作品No.1, 2, 7, 14, 41, 43などがある。

孫世代が老人を助ける内容とはいつもは独りで暮らしている老人に、手紙を書くとか田舎に会いに行くとか、一緒に畑の手伝いをする、などである。そして、「老い」が進行（病気やぼけ）してからの孫世代からの援助（看病など）についての記述も少なくない。病気を心配する気持ち、ぼけて行方不明になった老人をさがす、寝たきりでいやなおい閉口しながらも看護を手伝うなどである。No.1, 4, 6, 9, 10, 19, 37, 41, 43, 44, の作品がある。

項目5で「老い」が進行する状態を描く場面は多い。しかし項目7の老いを拒否したり、疎んじたりするという記述はさほど多くはない。「老い」の進行と、孫世代のとまどい、悩み、やむにやまれぬ拒否の思いなどを描いた5冊の作品は、1980年代になって登場したもので作品No.9, 10, 29, 45, 58である。

また、以上の分類によれば読者年齢層および絵本による作品群の内容の展開は同じであるようにみうけられる。

老人と孫世代の住み方では同居、別居のいずれの形も登場する。

表3は老人と孫世代との住居状態をみたものである。おばあさんの登場はおじいさんに比べて2倍の多さである。また、別居の方が同居よりも多く、別居から同居へと変化する場合もある。別居で老人と孫世代の交流があるのは肉親に限らず、近隣関係の場合もある。一時的に孫世代が老人を訪ねるとか老人が孫世代を訪ねることによってふれあう機会がつくられる。

表3 孫世代との居住形態

N=65		同居	別居	変 別居から同居
おじいさん	作品 No.	1, 10, 12, 18, 37, 41, 43, 56, 59, 61	3, 11, 14, 20, 22, 30, 46, 47, 50	9, 44,
おばあさん	作 品 No.	16, 21, 26, 27, 29, 36, 38, 45, 48, 52, 58, 63, 64	2, 4, 7, 8, 23, 25, 28, 31, 32, 33, 34, 39, 40, 42, 49, 54, 55, 57, 60, 62, 65, **19, **35,	13, 15, 51,

* 祖父母
** 通常時

*** 一人の老人と複数の同居、別居の孫世代
一人の孫世代と複数の同居、別居の老人

孫世代が老人を理解するきっかけは大きく二つのタイプに分けることができる。一つは、事件や出来事を通して老人に対する見方が瞬時的に変わるタイプである。この場合は短い期間を描いていて、時間の経過とともに事件が進行する順行型で描かれているといえよう。もう一つは、数カ月や数年間の時間をともに過ごし人間としての共感と理解を深めるタイプである。長い期間の扱い方については、過去と現在の両方の時間の中で、老人と子どもの交流が展開する。それは、① 順行型表現

② 現在から出発して回想的に過去にさかのぼる回想型表現

③ 現在と過去が交互に往復しながら表現される往復型表現などがある。

2) 孫世代の老人理解の様相

作品のあらすじを例示して論ずるにあたり、作中人物を次のように記号で表記する。

X=おじいちゃん、おばあちゃん、老人の世代

Y=孫世代

Z=親世代

(1) 見方が変わる場合についてまず見方が変わる前の段階がある。それらは以下の3つの場合である。

- ① 誤解をしていた
- ② 知らなかった
- ③ 疎んじていた

以下にそれぞれの例をあげる。

① 誤解をしていた例

「おばあちゃんの犬ジョータン」(作品No.29) = 老犬ジョータン = Xがそそうをするのは「ぼけたからだ」と家族は決めつけていた(誤解)。ある日、Xは泥棒を追い払う活躍をする。Xのいらいらが家族にも理解されるようになる。

② 知らなかった例

「バーブとおばあちゃん」(作品No.51) = 入院したZに代わってXがやってきて世話をしてくれるが、Yは気にいらぬ。しかし、Xの知恵に教えられ、また子守歌のエピソードなどで、YはXを理解していく。

③ 疎んじていた例

「おばあさんのケーキ」(作品No.2) = 近隣関係にあるXとYがアパートの裏側にある草原をめぐる反目し合っている。Xが通る時、Yはおどかした。Xは倒れて立ち上がれない。そして助けてあげた。Xは得意のケーキをYに食べさせれば喜ぶだろうと思う。

以上の老人に対する見方が変わるきっかけの例を整理すると

- ① 老人のもっている日常生活の上での知恵に触れること
- ② 世話をしてもらうこと
- ③ 人間としての優しさや善意が引き出されること

などがあるといえよう。

いずれも直接に関わる機会があったから見方を変えることが出来たのであろう。

(2) こどもの老いと老人を理解するしかた、すなわち子どもが老人と交流し、理解し、信頼しあう過程を見ると、いくつかの状況・様相に分かれる。それは、

- ① 世話をしてもらうことによる親しみ (親愛)
- ② 優しさや善意を引き出される (善意)
- ③ 老人の日常生活の知恵や個性に触れる。 (尊敬)
- ④ 老人の人生観や人間としての誇りに触れる (共感)
- ⑤ 老人の経歴を知る (納得)
- ⑥ 人間や人生そのものを学ぶ (人生)

などである。各作品が6つの理解の型のいずれに該当するかを表4に示した。

表4 「老いと老人」に関する理解の型

理解の型		① 親愛	② 善意	③ 尊敬	④ 共感	⑤ 納得	⑥ 人生
高・ 中・ 学 年 向	N=18 作品No.	3 8, 15, 16,	7 1, 2, 3, 4, 6, 13, 17,	2 5, 14,	2 9, 12,	4 7, 10, 11, 18,	0
中・ 低 学 年 向	N=22 作品No.	7 23, 24, 28, 32, 33, 39, 38,	7 25, 26, 27, 31, 34, 35, 37,	4 19, 21, 30, 40,	0	4 20, 22, 29, 36,	0
絵 本	N=25 作品No.	6 41, 43, 44, 47, 50, 56,	9 52, 54, 55, 57, 59, 61, 62, 64, 65,	2 49, 60,	1 48,	3 46, 51, 63,	4 42, 45, 53, 58,

各作品の中で孫世代が老人を理解する型は一つではない。理解の型が複数である場合には主な型の方で分類した。6つの理解の型を読者年齢層別の作品および絵本において比べると異なる傾向はみられない。全体として①親愛や②善意という情意的、感性的な理解が多くなっている。また、人生そのものの理解を促している4作品がいずれも絵本である点が注目される。

次にこれらについて主な作品例を挙げて述べたい。

① 親愛型

「おじいちゃん」(作品No.50) = Yは遊んでもらっていた過去との対比で「そとであそべない」Xの状態や、座っていたイスががらんとしてしまったことを知る。

「あそびあいてはおばあちゃん」(作品No.15) = 亡くなった後、物語をしていた時のXの声を思い出すことが出来る。このように世話をしてもらったことが理解を導く基盤になっている。

「たろうとおじいちゃん」(作品No.41), 「さあ歩こうよおじいちゃん」(作品No.43) いずれもYが世話をされる側から逆にXに手をさしのべようとする姿が描かれている。病気になって散歩に行けなくなったXを誘う。元気に働いたことを話してもらう。するとXに生気がよみがえってくる。病気の後遺症で動けないXに対して、Yは、以前に遊んでもらった通りのことをする。歩く練習には肩を貸す。

「おじいさんのハーモニカ」(作品No.44) = いなかから都会へ越してきて同居が始まったがXは気力を失っている。YはXを励まそうと、以前教えてもらったハーモニカをふく。

② 善意型

「高層アパート」(作品No.1) では都会の家族のところにXが引っ越す。XとYは遊び場をさがして、エレベーターや屋上での遊びを工夫した。しかし管理人に怒られてしまう。ふたりは、Xが昔住んでいたところを訪ねた。りんごをもいってくるはずだった。Xが植えたりんごの木の前には大きな穴が口をあいている。Xの体が縮まったみたいに小さくなって顔色も悪い。Xはどうなるんだろう。Yも悲しい。そして悲しいってことでXの病気も始まった。

「窓のむこうの顔」(作品No.4) = 老人ホームの見える近所に住むYは、向いの老人ホームのベランダに小鳥の巣箱をかけて、いつも小鳥を待っている年とった女の人に心を奪われ

た。むこうもこちらに気がついたようである。クリスマスが近づいてクロワッサンやクッキーをもってホームの前まで行くが中に入れずうまく行かない。ある日、窓のむこうの人の姿が見えなくなり、二ヶ月たってもあれっきりみえない。

これらの作品中の孫世代は世話をしてもらったり一緒に時を過ごしたりする中で孫世代の優しさや善意が引き出され、誰かに強制されなくても、人間としての素朴な喜びや悲しみを分け合っている。

③ 尊敬型

「おばあちゃんとわたし」（作品No.49）のふたりは近隣関係である。Xは、花や、りんごあめやクッキーやケーキをつくるのが得意でYにくれる。Xにもわたしくらいの時があったんだらう、やっぱりその時のXの近くにも老人が住んでいたのかと考える。

「てのひらのピーコ」（作品No.19）のXは海の近くに一人で住んでいて3月1日になると倉からお雛様を出して都会のYのところまで持ってきてくれる。「ちいさい時にはな、ほんものがあったかいものを与えとかな」と考えている。いんこのピーコが弱った時「ピーコはどんなにあったかなおふとんの中よりもあいみの手に抱かれている時の方が安心なんよ」と教えてくれる。そんなXが頭の血管が切れて集中治療室に運ばれ酸素テントに入っている。Yは思わずテントの中に入ってXの手をにぎりしめた。

「じいと山のコボたち」（作品No.14）＝Xはつれあいをなくしてからわけがわからなくなった。Yは宿題の昔話を聞きに来たが様子がおかしいと思う。雨上がりの日、Xは魚が腹をすかしていると谷川に向かった。本流は黒濁りじゃというXはあの谷なら大丈夫というところを教えてくれる。「谷のまわりの山の木をみてみよ」木は木の葉を降らせて土を柔らかくし、生きた細い根をめぐらせて土を柔らかくする。雨はそこへ吸い取られて、すぐに谷へ入るようなことがないと教えてくれる。魚はYにもよくつれた。

これらの作品にみる孫世代は老人の個性に魅かれ生きる知恵や技術に刺激を受けている。老人が持っている知恵や技術が現代生活では役にたたないと考えるまに、日常生活を共にすることが信頼や尊敬をともなってそれを受け継ぐ状況を準備したと思われる。

④ 共感型

「ヨーンじいちゃん」（作品No.9）＝Xは75才で「一緒に暮らそう」という申し出を受けて10才のYのいる一家へ引越しをしてきた。Zが準備した部屋はお気に入りのペンキで塗り直し、気むずかしく自尊心にあふれている。洗濯物に色のしみがついているのを見つけて「やっつけ仕事でけしからん」と得意なインディコ染めで染め直す。ヨーンじいちゃんは恋をした。Yが「まだ女の人が好きになれるの?」とつぶやいたのがまずかった。「わしのようなおいぼれはもう惚れることもでけんと思うのか」と怒らせてしまった。Xは老人とはいえ人生を精一杯生きている。昔、ヒットラーが権力を握っていた時、Xはユダヤ人、ロシア人、ポーランド人に「ちょっと」ばかり手を貸したことがある。Xは「ちょっと」というのが口癖で、ずっと後になって（Xの死後）、Zは、ヨーンじいちゃんの〈ちっと〉の説明は彼のクリスマス物語だという気がする。

「おじいちゃんが冬へ旅たつとき」（作品No.12）＝Xはアメリカインディアンである。白人の「物、金」の価値観が入り込んでくるのがXは腹立たしいと思っている。白人は大金の賞金をつけて荒馬乗りを煽っている。Xは、命をかけてただ一人乗りこなし、馬をYに残す。

「ルピナスさん」（作品No.48）＝ルピナスさんは少女の時、Xと三つの約束をした。遠い

国々にいく、海の近くに住む、世の中をもっと美しくするために何かをする、というものである。年をとった時、残した約束を果たすためにルピナスの花を野や山に咲かせた。ルピナスの曾孫も同じ約束をした。約束が世代を越えて引き継がれていく。

これらの作品で孫世代は老人の人生観や人間としての誇りに触れることによって人間がどの様に生きたのか、生きていくのかを考えている。ここでは老人を理解するというよりも、人間同士の理解に至っているといえよう。ヨーンじいちゃんの場合はZがYの理解を助ける存在になっている。

このように、老人と孫世代をつなぐ世代の役割も描かれている。

⑤ 納得型

「おばあちゃんのヒマワリ」(作品No.7) = Xはつれあいがなくなってから元気がない。好きだった花畑の手入れもしなくなったという。さみしがって手紙をよこすXをYは弱虫だと思っている。いなかでXの昔の話を聞いた。疎開児童がじゃがいもを盗んでお百姓さんに腕をねじ上げられていたとき、「一つや二つくれてやりなさい」とお百姓さんを突きとばしたという。弱虫ではできないことだ。

「おじいちゃんのダイヤモンド」(作品No.10) = 脳軟化症になったXが行方不明になった時、Yは心配でさがしまわる。Xはきれいな夕日を見たといってふらりと帰ってきた。Zが物置の整理をしたときほこりをかぶった茶一色の油絵が出てきた。Zがこの絵は捨てないという。Xが家族を養うために絵描きをやめた時、残っていた絵の具で描いたものだった。Xは本当に夕日の赤色が好きなのだ。

「おじいさんのとけいだい」(作品No.20) = Yの小学校にある時計が止まった。心配そうにみているXがいる。つばめが巣をつくっていることがわかったとき「こわれたんじゃない」とびっくりするような声でいった。Xから、時計屋で一生懸命奉公して時計台をたてる夢を持っていた若い頃の話聞いた。

これらの作品の中で孫世代は老人の長い人生における喜怒哀楽や経歴を知る。前出の④と同じく共感を覚えている。老人の過去とは彼らの若い頃のことである。若い頃の経歴は、老人自身が語る時と、親世代が介在する場合がある。孫世代は近い将来青年になるのでありその予感を持って納得できると思われる。

⑥ 人生型

「たそがれえきのひとびと」(作品No.53) = 古い駅舎を借りて住んでいる貧乏な8人のXの生活を描いている。Yは駅舎の周りを遊び場にしている。貧乏故に料理が好きなのにごちそうを作れなかったり、旅に行きたいのに窓から眺めるだけだったり、ほらふきだったりしている。中に、自転車組立の王様がいる。8人が10ペンスずつ出し合ってくじを買った。大金が入った。お金が入ってY達の遊び場をつくったり、ごちそうをつくったり、友達をつくったりする人がいる。お金の勘定ばかりする人もいる。自転車の王様は変わらない。

「おばあちゃん」(作品No.45) = 同名の作品No.58と共に、老化と死を描いている。昔、働き者だったXは、ある日転んだことがきっかけで様子がおかしくなる。「あなたはどなたさままで」となり、赤ちゃんのように小さくなって亡くなった。Zから「それがにんげんのさだめ」だと教えられる。

同名の「おばあちゃん」(作品No.58) = Xはおむつをしている。ごはんはまだかいという。Zのことをどろぼうという。YはXが宇宙人になったんじゃないかと思う。そして、宇宙人

と暮らすのはむつかしいが生き物であるし、殺すのはよくないと思案する。

これらの作品で、孫世代は人生の価値について教えられている。それは、仕事であり、生命そのものである。これらは老いが進行した人すなわち全ての人においてまったく同じ価値であることを強く教えられている。教えているのは周囲の大人であり、なによりも、老人それ自身の存在である。

以上が、孫世代が老人を理解するにいたる状況、様相である。誤解をしたり、知らなかったり、わけもなく疎んじていたりするところから変わっていくものである。瞬時的であれ長期的であれ事件や出来事を通して経験を共有することによる理解のしかたであった。このことは老人に限らず人間社会一般に通じることと思われる。

そして孫世代が老人を理解する内容は以下の点で整理できる。

- ① 優しさ・善意
- ② 知恵・知識・技能
- ③ 個性・人間性
- ④ 生命・人生

作品の中から同居、別居の如何にかかわらず老人と孫世代のふれ合いの場の重要性がわかった。その「場」は、ほぼ以下の3つにまとめられる。

- ① 生活の場
- ② 遊びの場
- ③ 仕事の場

表5に各交流の場と作品数を示した。

読者年齢別にちがいはみられない。交流の場が変わることに意味がある例＝「おじいさんのガールフレンド」(作品No.30)に登場するXは日常生活の場では出番がない。昔のことや同じ話を繰り返してはYやZに疎んじられる。が、畑仕事になると尊敬される。

このように老人の特技が発揮されるためには多様な交流の場が必要だと思われる。

ところで、現実の生活では商品化と消費生活の高度化が進んでいる。そして、老人の持っている生活の知恵・知識・技術は「不用」にされる場合もある。そうすると孫世代が老人を理解することや知恵・知識・技術を引き継ぐことは無理である。老人の持っているものを「不用」にしようとする背景や理由を学ぶことが必要だと思われる。その学習によって過去から何を引き継ぎ、何を捨て、捨てたものをどの様に補うかなどこれからの暮らし方について一人一人が決めていくことが出来ると思われる⁵⁾。そのような課題からして老人と孫世代の交流の場は多様に準備されることが必要だと思われる。

また、各作品を読者年齢層別にみた時、孫世代の老人との交流のしかた、理解のしかたにちがいがみられなかった。一つには、絵本の性格づけに問題が残った。絵本は、幼児向けのものであれば、幼児から大人までそれぞれのやり方で読みこなすように出来ているものもあるということが出来る。またもう一つには、同じ作品を一人で読んでいく場合と読み聞かせをせらう場合があり、同一作品の読者年齢層はかなりの幅を持っているといえよう。これらの点をふまえ、今後さらに読者の発達段階と老人理解の関係について追究したいと考える。

表5 老人と孫世代の交流の場

現出作品数	(複数集計)		
	生活	遊び	働く
高・中学年向	15	5	7
中・低学年向	14	6	6
絵本	11	10	9

3) 老人にとっての孫世代との交流

孫世代が、老人の見方を変え理解を深めていく様相をみてきたが、ここでは老人が孫世代との交流をとおして変わって行く様相を例示する。

- ① 激励型＝老人が励まされる、一緒にいるだけで楽しい
- ② 回春型＝元気な頃を思い出す
- ③ 役割型＝孫世代に対する役割を自覚する

作品の例示にあたって表記は2)の方法に準じる。

① 激励型

「さあ歩こうよおじいちゃん」(作品No.43)ではリハビリテーションを手伝うYがいる。

「だってだってのおばあさん」(作品No.52)では、Xの年の数をまちがえたYである。それがきっかけになってXは元気が出てくる。XはYに励まされたといえよう。

「おじいちゃん」(作品No.50)＝たわいもない遊び相手になることじしんが楽しみである。

② 回春型

「たろうとおじいさん」(作品No.41)、「おじいさんのハーモニカ」(作品No.44)ではいずれも退院してきて元気がなく、なすすべのないXの姿がある。しかし、昔、XがYに教えた散歩道やハーモニカの音楽に誘われて元気だった頃を思い出す。

「おばあちゃんのヒマワリ」(作品No.7)＝Xが病気になる。YはXの昔の経歴を知って見直している。そのことがXには「元気な心をくれた」と思う。

③ 役割型

「おばあちゃん」(作品No.13)＝Yの両親が死亡してXと一緒に暮らすことになった。Yがサッカーをやりたい時、Xは反対する。しかしサッカーをやっているところにきて応援する。一緒に養老院の見学に行く。「年寄りばかりの中において外の世界をみないで過ごしていればいやなもの」だと思ふ。XにとってYは薬だと思ふ。XとYは「気をつけていこうね」と約束する。

「良夫とかな子」(作品No.6)＝Xはぼけていた。Xは自分の娘だと思つたYの友人が入院した時、看病する。YやZは拒否することなく付き合った。人の世話をする中でぼけが治っていった。

老人が持っている知恵や価値観を意識的に伝えようとする作品もある。「おじいちゃんが冬へ旅たつとき」(作品No.12)「じいと山のコボたち」(作品No.14)である。そのほかに多くの作品は、老人の知恵や技術が日常生活のはしばしで孫世代を育て助ける役割の中で自然とにじみでてくるものである。

これらの作品から老人にとっての孫世代との交流の意義は二つにまとめられる。

- ① 老人個人にとって生きる力や楽しみを与えること
- ② 文化や知恵を伝え、後世代を育てる意義

結 語

老人と孫世代の交流の様相を児童文学の中で分析した。その結果次のことがわかった。

① 孫世代の老人理解の過程や状況には多様性がみられた。

それらは親愛型、善意型、尊敬型、共感型、納得型、人生型に分けられた。

いずれの読者年齢層の作品および絵本においても傾向にちがいがなく親愛型や善意型の情

意や感性による理解が多かった。このことは、孫世代の老人理解にとって情意や感性的な理解を保障する教材や学習方法の必要性を示していると考えられる。

- ② 絵本には年齢に関係なく読解されるものがあつた。また、読み聞かせなどの条件によって読者年齢の幅が変わることがある。今回の読者年齢層の分け方では作品内容にちがいはみられなかったと考えられる。
- ③ 老人理解の内容は感謝や善意の心、知恵や知識・技能、個性や人間性、生命や人生そのものなどに分けられた。これらは老人に内在するものである。
- ④ 孫世代が老人と交流する場は、生活の場、遊びの場、仕事の場であつた。
- ⑤ 親世代が孫世代の老人理解を助ける役割をもっている。
- ⑥ 老人にとっての孫世代との交流によって老人が変わる過程や状況がみられた。それらは、激励型、回春型、役割型に分けられた。
- ⑦ 老人にとっての孫世代との交流の意義は、老人個人の生きる力を得ること、文化や知恵を伝え、後世代を育てることであつた。

以上のように孫世代にとっても老人にとっても意義ある相互交流であることがわかつた。そして、孫世代が情意や感性をもって深く老人を理解する前提に交流の機会があつた。それは、生活、遊び、仕事という日常生活における場面であると思われた。交流を成立させる必要条件は図1にまとめられる。

児童文学に現れた老人と孫世代の交流は、現実社会のある側面を表している。だからこそ孫世代に受け入れられるものと思われる。

現実の老人問題の解決を困難にしている大きな側面は、老人の中に内在するものを不用、無意味とする生活の様式である。ただでさえ、老人との交流の機会の少ない世代にとって老人の存在さえも否定することになりがちである。

そのような状況の中で老人と孫世代の交流の機会を多様に作ること、老人の持つものを不用とする生活様式を見直していくことが必要だと思われる。

また、これらの児童文学を孫世代はどのように読んでいくのかについて引き続き追究して稿を改めたい。

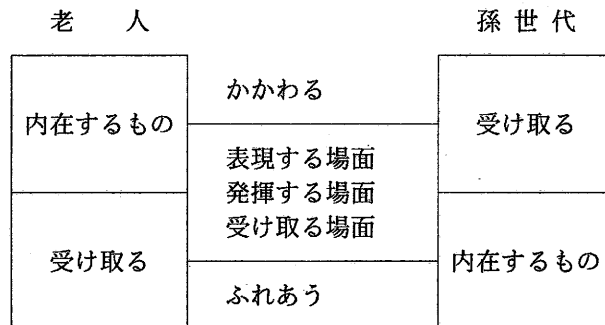


図1 老人と孫世代の交流の成立図

あとがき

本研究の前段には1988年度大学院生佐々木晶子との研究を1989年度日本家庭教育学会大会にて口頭発表した経過がある。その後、文学研究の菅野圭昭の参加を得て分析、討論をすすめてきたものである。

注および引用文献

- 1) 田中孝彦「学校生活と人間形成」岩波講座『教育の方法9 子どもの生活と人間形成』
1987. 10. 29 P. 183 丹羽徳子（岐阜県中津川市立神坂小学校教諭）の指導による
- 2) 前掲書1)に同じ P. 184
- 3) 宮地敏子「『老い』を子供に伝える」朝日新聞 1988. 2. 28
- 4) 高橋美恵子「老いゆくものとこども—幼児文学・児童文学のなかの「老い」—
立教大学教育学科研究年報第32号 1988. 12. 20
- 5) 吉原崇恵 家庭科教育における体験学習の検討と追体験学習へのアプローチ
静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）昭和62年3月23日 第18号 PP. 211～226
「おばあちゃんの知恵」の教材としての価値の検討 年報家庭科研究 1985年度
家庭科教育研究者連盟 昭和61年7月28日 PP. 50～55